

## 図書館員の心に残った本 2018

年末年始になると、新聞各紙や雑誌、書店などで、この一年間で印象に残った本が特集されます。では、図書館員は、どんな本や分野に興味や関心を持って読書をしていたのでしょうか。図書館長も含め、図書館員が2018年に読んで、特に心に残った本を厳選して紹介します。

	書名 / 著者 (上段)	内容紹介 (下段)	請求番号
マスメディア	<b>ファクトチェックとは何か / 立岩陽一郎, 楊井人文著</b> 岩波書店, 2018.4 (岩波ブックレットNo.982) 選者 シルバースタッフ (図書配架担当) K.O	「ファクトチェック」とはマスメディア等で発表されている言説の内容が事実に基づいているかどうか、正確なのかどうかを調べ、その結果を発表することを言います。その対象は世の中に影響を与える政治家や有識者などの人物の言説も対象となります。最近「フェイクニュース」という言葉を聞くことが多くなりました。このフェイクニュース問題に対抗する手段として、ファクトチェックという活動が注目されるようになったそうです。たくさんの情報が乱れ飛んでいる社会で私たちは何が本当で間違っているのかを見極めることが重要となってきており、このファクトチェックはその有効なツールだと思います。NPO法人が活動しており、ホームページから過去のファクトチェックを行った事例が発表されています。是非この本を読んで活用されることをお勧めします。又「岩波ブックレット」はかず多くのタイムリーなテーマを60～70ページ程度にまとめたシリーズ小冊子であり、現代のさまざまな問題を考察する上で手短かに読める書物であると思います。	081-I95-982
国体論	<b>国体論：菊と星条旗 / 白井聡著 集英社, 2018.4 【集英社新書0928A】</b> 選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ	本書は、「国体」という概念を通して、明治維新から現代に至るまでの日本現代史を読み解く。面白いのは、「国体の形成・発展と衰退、その崩壊」が二度繰り返されるという仮説を立て、「戦前の国体」と「戦後の国体」を並列に置き、史実から論証し、近現代日本史の構造的見取り図を提示している点だ。「国体」は明治になってから一般化した言葉で、歴史的伝統など万世一系の天皇を長とした国家の根本体制を意味する。戦後は新憲法のもと象徴天皇制に移行し、主権在民の民主国家となったため、「国体」という言葉は死語になったように思える。しかし、白井氏は「国体」は再編されたかたちで現在も生き残っているという。では、「戦後の国体」とは何なのか。本書の副題に『菊と星条旗』とあるのが、その答えだ。「アメリカの構想した戦後日本の民主化とは、天皇制という器から軍国主義を抜き取り、それに代えて『平和と民主主義』という中身を注入することであった。つまり、対米従属構造の下に天皇の権威があり、さらにその下で営まれるものとして戦後民主主義は規定されていた」のである。アメリカを事実上の頂点とする体制が「戦後の国体」なのだ。さて、本書の考察は2016年8月に今上天皇が生前退位の意向表明をした「お言葉」の文脈を紐解くことから始まる。白井氏は、「『象徴しての役割を果たす』こととは、ただ単に天皇が生きていればよいというものではなく、また摂政が代行しうるものでもない。文字通り『全身全霊をもって』国民の平安を祈り、また災害に傷ついた人々や社会的弱者を励ますために東奔西走しなければならない職務である、という御自身の考えがはっきりと打ち出されたのである」と指摘する。しかし、政権に近い「有識者」からは「天皇家は続くことと祈ることに意味がある。それ以上を天皇の役割と考えるのはいかがなものか」と、天皇の生き方を否定するような発言が相次いだ。「お言葉」は『『象徴天皇制とは何か』という問いへ国民の目を向けさせることによって、それが戦後民主主義と共に危機を迎えており、打開する手立てを模索しなければならない』との呼びかけがなされたのである」と解釈する。本書が提起した「戦後の国体」という斬新な視点を得ることにより、危機を迎えている象徴天皇制は戦後民主主義の危機であることが鮮明になる。そして、この問題意識から展開される緻密な分析により、日本社会が政治的にも、経済的にも、軍事的にも、異様なまでの対米従属構造に組み込まれてしまった歴史と、根本的な原因を理解することができるのである。	155-Sh81k
日本史	<b>日本外史：幕末のベストセラーを「超」現代語訳で読む / 頼山陽著；長尾剛訳</b> PHP研究所, 2010.1 選者 シルバースタッフ (図書配架担当) K.O	日本史の教科書に必ず載っている頼山陽の「日本外史」は有名ですが、これまでその内容については全く知りませんでした。この本をたまたま当図書館で見つけ副題を見てぜひ読んでみたいと手に取りました。頼山陽は尊王思想の持主だったようで、天皇への忠誠心の有無を視点に平氏・源氏から徳川家康までの主だった人物の評価が書かれています。読まれ始めたのは「ペリー来航」の17年前外国船が頻繁に出没し、鎖国体制の中でのんびり過ごしていた日本人が国の今後の進路を考え始めた頃で「志士の必読書」として定着していったそうです。日本史、特に幕末期に興味のある方は是非読んでおきたい1冊です。話はそれますが、大学図書館では市立図書館には置いていない多くの書物が所蔵されており、活用しない手はないですね！	210.1-R12nb
日本史	<b>日本軍兵士ーアジア・太平洋戦争の現実 / 吉田裕著 中央公論新社(中公新書), 2017.12.</b> 選者 図書館長 矢羽々崇	法学部の福永文夫先生に、図書館講演会の打ち合わせの際に薦めていただいた本。日本軍兵士を「身体」という独自の視点から眺めて、第二次世界大戦時の日本軍の問題点を鋭く抉っています。 読むと愕然とさせられることばかりです。戦争犠牲者310万人の9割が戦争末期の1年半に集中していること、餓死や病死、自殺で死んでいった兵士の割合が異常に高いこと、歯医者が少ないために兵士の歯がボロボロになっていたり、ロクな衣服や靴を与えなかったり、戦闘以前にすでに戦闘能力が低かったこと、など。体験談だけに依らずに、実証的なデータをもとに語っています。 最近、外国人実習生をめぐる劣悪な状況と、その自殺者数の多さ(かつ政府による数値改ざん)が問題になりました。個人を人間としてではなく、戦闘や労働のためのタダの機械としてみなす国家の現実を見据えてほしい。もし戦争になれば、戦場にかりだされるのは学生皆さんの世代なのです。	C-210.75-Y86n

ドイツ史	<p>ゲッペルスと私：ナチ宣伝相秘書の独白 / ブルンヒルデ・ポムゼル, トーレ・D.ハンゼン著；森内 薫, 赤坂桃子訳 紀伊國屋書店, 2018.6 234.074-P78g</p> <p>選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ</p> <p>本書『ゲッペルスと私』は第二次世界大戦中、1942年から終戦までの3年間、ナチスの宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッペルスの秘書として働いたブルンヒルデ・ポムゼル[1911—2017]の伝記である。2017年6月に岩波ホールなどで公開されたドキュメンタリー映画『ゲッペルスと私』の書籍版だ。映画は、うっかり見逃してしまい残念に思っていたところ、本書が刊行されていることを知り、手に取った次第である。2013年に収録されたポムゼル(当時103歳)の30時間に及ぶ独白インタビューをもとに編集され、政治学者で社会学者のトーレ・D.ハンゼンの詳細な解説が付されている。タイトルは『ゲッペルスと私』なので、ゲッペルスの話題が中心になるのかと思わせるが、実はそうではない。原書名は、『あるドイツ人の一生——ゲッペルスの秘書の語りは現代に何を教えているか』であり、ヒトラーの時代を生きた女性の生き様を描いている。ポムゼルの幼少期から、青春時代の記憶、ナチ党への入党、国営放送局での仕事、国民啓蒙宣伝省への転職、ゲッペルスの秘書としての日常、戦禍の体験、終戦によりソヴィエト軍に捕らえられ1950年まで強制収容所に抑留され、そして新たな人生を開始するまでを語っている。ポムゼルは一般的な家庭に育ったごく普通の女性である。政治には全く無知で無関心であり、ヒトラーに心酔していた訳でも、反ユダヤ主義者でもない。ただ単に、就職に有利になるだろうという理由でナチ党に入党した。ナチスが選挙で躍進して、通りで突撃隊員をよく見かけられるようになって、何も考えようとしなかった。強制収容所についても、「そんな施設に収容されるのは、政府に逆らった人や、殴り合いの喧嘩をした人で、まずは収容所で矯正するのだろう」と、深く考えてはいなかった。「あの当時、自分たちの手から自由が奪い取られていたことに、私たちはまるで気づいていなかった。私たちはただ、規定されていた筋書きどおりに考え、新聞やラジオが伝えるまま思考していただけだった」のである。そして、ポムゼルは「私は収容所の中で行われていたことを——あれらの写真や集団墓地などを——知ったとき、愕然とした。でも、何も知らなかったのなら、やっぱりそれは私たちの罪ではない。そして私個人の罪でも断じてないはず」と断言する。私は本書を読んでいる間、自分がヒトラーの時代に生きていたら、どのような行動を取ったのだろうかとずっと考えていた。国会議事堂放火事件が共産党員の犯行であると断定されたときに、ドイツ全土でユダヤ人が迫害された水晶の夜に、白バラ抵抗運動でショル兄妹が処刑されたときに、抗議し抵抗することはできたのだろうか。ポムゼルの発言は、読者にとっても重い問いかけを投げかけている。</p>
	紀行

探検	<p><b>極夜行 / 角幡唯介著</b> 文藝春秋, 2018.2 <span style="float: right;">297.8-Ka28k</span></p> <p>選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ</p> <p>探検記の傑作である。兎に角、行間からほとぼしる臨場感と緊張感が半端ない。「ページを繰る手が止まらなくなる読書」を久しぶりに体験した。読後には、単に面白かったというだけではなく、「脱システム」や「人間と自然との原初的な関係」など、哲学的な余韻にも浸ることが出来た稀有な作品だ。極夜(きょくや)とは南北の極圏で、一日中太陽の昇らない状態が続く現象をいい、南極で5月末から、北極では11月末から、約1か月半続く。探検家の角幡唯介氏は、2016年から2017年の冬に、先住民集落としては世界最北の地、グリーンランドのシオラパルクに拠点を置き、極夜の中、グリーンランドとカナダの国境付近を四ヶ月かけて、犬橇を引くウヤミリックを相棒に探検した。本書はその記録である。冒頭、東京医科歯科大学附属病院分娩室で、角幡氏が妻の出産に立ち会う場面から始まる。予想していなかった導入部に面食らうが、探検の最後に妻の出産現場の情景がとても重要な意味を持つことになる。極夜の探検は生死に関わる困難が当然、想定されるため、本番に向けての実験行、偵察行、食料や燃料などを保管するためのデポ設置行など、3年の準備期間をかけて万全の状態ですべて始まる。しかし、次から次へとまるで何かに呪われているかのように、絶体絶命の不運が角幡氏を襲う。生死の境の逆境に、探検家はどのように立ち向かうのであろうか。私は角幡氏の精神の強靱さに一体、何度、脱帽したことか。NHKのETV特集で2018年4月(2018年12月に再放送)に「極夜 記憶の彼方へ～角幡唯介の旅～」と題したドキュメンタリーが放送されたので、ご覧になった方も多いただろう。自撮りカメラには、極限の状態に置かれた角幡氏の生々しい姿と肉声、探検家の思索の跡が記録されていた。角幡氏と共に逆境に立ち向かった犬のウヤミリックの姿も見る事が出来たので、とても嬉しかった。しかし、本書『極夜行』で体感できる痛いほどの緊張感はなかったように思う。それもそのはずである。生死の境を彷徨っているときの情景は、自撮りで撮影することなど、不可能なのだ。これから『極夜行』を手に取り、想像を絶する極夜の探検を体感できる人が実に羨ましい。</p>
社会事情	<p><b>世界の辺境とハードボイルド室町時代 / 高野秀行, 清水克行著</b> <span style="float: right;">302.453-Ta47s</span> 集英社インターナショナル 集英社 (発売), 2015.8</p> <p>選者 匿名希望</p> <p>インパクトがあるタイトルにつられ、ひとたびページをめくれば型に填まらない知識のぶつかりあいで知的好奇心が刺激されます。「ソマリアの紛争は応仁の乱に似てるよね」と、歴史学者と辺境ライターが楽しげに対談するこの本は、講義のメインテーマより脇道にそれた雑談の方を楽しんでしまう人におすすめです。</p>
ナショナリズム	<p><b>「右翼」の戦後史 / 安田浩一著</b> 講談社, 2018.7 【講談社現代新書2485】 <span style="float: right;">311.3-Y62u</span></p> <p>選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ</p> <p>著者の安田浩一氏は、差別やヘイトスピーチなどの社会問題を精力的に取材しているノンフィクションライターで、『ネットと愛国：在特会の「闇」を追いかけて』(講談社, 2012年)では講談社ノンフィクション賞を受賞している。さて、右翼とは何か。安田氏は、右翼を「自由、平等の理想を掲げる左翼とは違い、国家への忠誠が優先される。日本の場合、そこに絶対不可侵の天皇という存在が加わる。急激な変化を望まず、国家と民族の威厳を保ち、歴史の風雪に耐えた伝統と慣習を守り、国内の安寧秩序に尽力する。右翼は極めて濃度の高い『日本』であろうとした」と定義する。だとするならば、外国人に対する読むに堪えない誹謗中傷をネットで繰り返す「ネット右翼」と「本物の右翼」に、どれほどの違いがあるのだろうか。これが安田氏の問題意識だ。私も、国家と民族の威厳を保つことを大切にすることは右翼がアメリカに従属することを自明のこととしていることが不可解であった。本書はこうした疑問を丁寧に解決してくれる。とても有難い一冊だ。右翼を大まかに分類すると、天皇のもとにおける万民平等社会の実現を目指した「伝統右翼」、街頭宣伝が中心の「行動右翼」、暴力団を母体とする「任侠右翼」、憲法改正を目標とする「宗教右翼」、反米と自主防衛の「新右翼」、そして排外主義の「ネット右翼」となる。現政権のもと憲法改正の旗振り役を務めている日本会議は「宗教右翼」、1970年に陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で自衛隊員に蹶起クーデターを呼びかけて自決した作家の三島由紀夫は「新右翼」として解説されている。本書で特に興味深かったのは「伝統右翼」に関する説明だ。1881年に頭山満らによって福岡で結成された政治結社「玄洋社」は「日本初の右翼団体」とされるが、明治の反政府運動である「自由民権運動」の流れの中で生まれた組織なのだ。当時はまだ右翼や左翼という区分けはなく、頭山満はフランス市民革命の思想を日本に紹介した中江兆民とも親しかったという。戦後、その「伝統右翼」が消えて、親米の右翼が主流となる。この経緯については第三章「政治・暴力組織との融合」に詳しい。1951年当時の法務大臣、木村篤太郎が立案した物騒な組織に関する驚愕の史実も紹介されている。本書を紐解くことにより、「右翼」は決して単一の色ではないことが分かった。</p>

アメリカの政治	<p>NOでは足りない：トランプ・ショックに対処する方法 / ナオミ・クライン [著]；幾島幸子, 荒井雅子 312.53-KL4n          訳 岩波書店, 2018.7          選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ</p> <p>Naomi Klein (ナオミ・クライン) はカナダ生まれのジャーナリストで、3冊の主著がある。『ブランドなんか、いらない：搾取で巨大化する大企業の非情』(はまの出版, 2001年) (新版, 大月書店, 2009年)、『ショック・ドクトリン：惨事便乗型資本主義の正体を暴く』(岩波書店, 2011年)、『これがすべてを変える：資本主義vs. 気候変動』(岩波書店, 2017年)の3冊だ。どれも現代資本主義社会が抱える深刻な問題を緻密な取材で分析した傑作である。最新作となる本書『NOでは足りない：トランプ・ショックに対処する方法』は、トランプ大統領を生み出した原因を分析した数多ある書の中でも最良の書といえる。ナオミ・クラインの洞察に説得力があるのは次の分析から分かるであろう。「トランプは、人間の生を人種、宗教、ジェンダー、セクシャリティ、外見、身体能力といったものを基準にして序列化する強力な思考システムの産物にほかならない」「彼は100パーセント予測可能な存在であり、それどころか、かつて至るところに蔓延し、ずっと以前に抑え込まれるべきだった思想や動向の、陳腐な結果以外の何ものでもない」と断言する。つまり、「悪夢のような政権が明日終わったとしても、それを生み出した政治的状況、世界中にその複製を作り出しつつある状況は、立ち向かうべきものとして存在しつづける」のだ。トランプの思想や政策を分析する上で、彼女が上記3冊で展開した理論が見事に当てはまる。つまり、本書はナオミ・クラインの入門書としても最適なのだ。例をあげると、まず、トランプが中身のないブランドで大儲けする方法に着目し、高級不動産のブランド化で不動産王となったことや、アメリカ合衆国大統領という究極のブランディング・ツールを手中にしたことで、トランプ・ブランドや事業の価値が増大し、莫大な利益をあげるとの指摘は『ブランドなんか、いらない』で取り組んだテーマだ。パリ協定から離脱し化石燃料企業を強力に支援する政策は、保守派が気候変動を否定する論理を解明した『これがすべてを変える』の分析と一致する。トランプが移民を排斥し、反イスラム政策を取り、環境保護規制や社会福祉事業など公的な領域を縮減し、戦争、民間刑務所、軍事請負企業、経済危機、自然災害から利益をあげる画策は、惨事便乗型資本主義の正体を暴いた『ショック・ドクトリン』で論証したことだ。本書は今こそ読むべき書であるが、1月末の時点で貸出件数はゼロのままなのが残念だ。トランプ的な思想や政治状況に怒りを覚える皆さんに手に取ってほしい。</p>
部落問題	<p>私のダイガク講座：これでわかった！部落の歴史 / 上杉聰著 316.36-U47k          解放出版社, 2004          選者 参考係 (レファレンス担当) 高島豊</p> <p>部落差別は江戸時代に法制化され、明治の「解放令」で法的な根拠は消滅しました。けれど、解放令から150年も経った今でも、日本のあちこちで差別はくすぶり続け、人々に暗い影を落とし、苦しめています。こうした差別意識は、差別が法制化される時代よりも遙か昔、中世まで遡ることができ、日本人のDNAに深く刻まれてしまっているのかも知れません。差別意識を人々から取り払うには、部落差別の歴史と実態を正しく知り、いかにこの差別が根拠のない理不尽なものであるかを理解するしかありません。自ら屠殺場に飛び込んだ体験談から始まるこの本は、講座形式による話し言葉で、部落差別について生き生きと分かりやすく解説しています。そしてこの差別が、将来はなくなるという希望を与えてくれます。理由もなく、なんとなく被差別部落を疎ましいと感じたり、遠ざけたりしている人だけでなく、差別に疑問を感じている人にも是非読んでもらいたい本です。</p>
階級	<p>エスタブリッシュメント：彼らはこうして富と権力を独占する / オーウェン・ジョーンズ著；依田卓巳 361.4-J72e          訳 海と月社, 2018.12          選者 閲覧係 (利用者サービス担当) 佐藤たけひろ</p> <p>著者のオーウェン・ジョーンズは2011年に20代で発表した初の著作『チャヴ：弱者を敵視する社会』(海と月社, 2017年)が世界的ベストセラーとなり、英国の左派を代表する若手論客となった。本書『エスタブリッシュメント』は英国で2014年に刊行された第2弾だ。著者はエスタブリッシュメントを「成人のほぼ全員が選挙権を持つ民主制において、自分たちの地位を守らなければならない有力者の集団」と定義する。つまり本書は、富裕層が自らの利益を守るために、いかに合法的に巧妙に、政治、経済、メディアの枠組みを作り上げているのかを分析している。本書を読み解く上で重要な概念となるのが「新自由主義」だ。「新自由主義」とは、エスタブリッシュメントが「常識」と見なす経済思想・政治理念で、「自由な経済活動」を錦の御旗として民営化、規制緩和、福祉削減、緊縮財政、自己責任などを唱え、政府による介入は最小限にすべきとする。この基本理念は、戦後の復興計画や福祉国家制度で競争市場に対する信念が弱まったことに危機を感じたオーストリアの経済学者、フリードリヒ・ハイエク[1899～1992]やアメリカの自由市場経済学者、ミルトン・フリードマン[1912～2006]が「国内での自由放任主義」と「対外自由貿易」を唱えたりベラリズムを起源とする。本書で強調していることは、「新自由主義」を信奉し、国家を忌み嫌うエスタブリッシュメントが、実は国家に完全に依存して繁栄している事実である。著者はこれを「富裕層のための社会主義」と皮肉交じりに呼んでいる。エスタブリッシュメントが、政界、官庁、メディア、警察、金融、財界などを牛耳る一方、末端の庶民には「自己責任」を徹底させる実態が次々と明らかにされる。金融危機の際の銀行救済、特許法、著作権・商標法、有限責任法、破産法、国からの援助を受ける企業の研究開発費、国費による道路、空港、鉄道などのインフラ整備、法人税率の引き下げ、「企業への直接税」から「個人への間接税」への移行、民営化された鉄道網への公的資金補助、化石燃料業界、原子力産業、軍需産業への補助金、福祉や雇用支援、刑務所、警察、NHS (国民医療制度) の民営化でサービスが劣化しても潤う企業、果てには無料の労働力を提供して企業を支援する「ワークフェア」制度まで、企業が何重にも国家に守られている現実には驚くばかりだ。そして「新自由主義」という「常識」は、日本のエスタブリッシュメントにとっても基本理念となっており、同様の政策が着実に実行に移されていることに気が付くのである。</p>

貧困	<p>地を這う祈り / 石井光太著 徳間書店, 2010.10 368.2-175c</p> <p>選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) 男石</p> <p>世界最貧層の人々の暮らしを写真や文章でまとめたノンフィクションです。 ・物乞いをする為いマフィアによって腕を切り落とされた少年・喜捨を得る為に家族の死体をさらす者・下半身をあらわに路上で亡くなっている売春婦・シンナーで幻想に浸る少年たち・檻に入れられた障害児・イボだらけの体をさらす男性 等、載せられた写真やそれらを説明する文章はどれをとっても壮絶すぎる。著者は写真を撮る時は経緯をもって問題提起を促す為に撮るそうです。この現実を知らないで一生を過ごせるかもしれないが知らないでいることは罪悪感が溢れる。同じ地球に存在する理不尽を考え、又、援助や人権の言葉の根本がそこにあると感じる良著。</p>
歴史教育	<p>アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書：EJ対訳 / ジェームス・M・バーダマン, 村田薫編 ジャパンブック, 2005.2 372.53-A44f</p> <p>選者 図書館職員</p> <p>アメリカを旅行して観光名所や博物館を訪れてはみたけれど、あまり理解ができない・・・。 英語の問題に加え、アメリカの歴史を理解していないことが大きな要因と気づき、帰国後に読みました。 この本はバージニア大学のE.Dハーシュ教授が編纂した6冊の小学生用教科書からアメリカ史の部分を抜粋して1冊にまとめたものです。 元々大学の教壇で、大学生の持つ文化的な基礎知識が乏しくなってきたことに危機感を覚えたことがきっかけだそうです。 小学生用の教科書ということで、英語は読みやすく、対訳つきのため、つまづくことなく読み進められます。 アメリカ史の重要な用語の勉強にもなりました。(「南北戦争」「奴隷解放宣言」「天然痘」など・・・何と言うでしょう?) アメリカの視点で通史や、世界、日本のことが見られます。1冊で何通りもの学び方ができる良著として、2018年の私の心に残った本です。</p>
認知症	<p>注文をまちがえる料理店 / 小国士朗著 あさ出版, 2017.11 493.75-O26c</p> <p>選者 カウンタースタッフ 匿名希望</p> <p>認知症の方々が働く料理店があるのですが、それをオープンした経緯や実際に働いている方がどう変わったかを書かれている話。(ノンフィクション)お客さんにコンセプトを理解してもらったうえでのお店なので、「もし店員さんがまちがえてしまっても、皆で許し合いましょう♪」という和やかな空気のお店であることが伝わって来ます。 「まちがえても良いんです」「まちがえなくても良いんです」「ミスは大したことじゃない」そんなことを教えてくれるお店になっているのだとか。 私も、ぜひ一度うかがってみたいお店になりました。</p>
広告	<p>広告コピーってこう書くだ!読本 / 谷山雅計著 宣伝会議, 2007.9 674-Ta88k</p> <p>選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) 匿名希望</p> <p>著者の谷山雅計はガスパッチョやTUBAKI、Yonda?の広告クリエイターだ。本書には著者が競合プレゼンで負けた「そうだ、京都、行こう」も落ちた理由とともに出てくる。12年前に書かれた本なのに、驚くほど短くシンプルな文章は広告クリエイターらしい言葉選びととれるが、それは著者の基本姿勢でもある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「なんかいいよね」禁止。</li> <li>・他人の気持ちを「カッコ、つきでわかってあげる</li> <li>・意味で書いて、生理でチェックする。</li> </ul> <p>自身の感覚を大事にして、身の丈の視線で商品と世界の見出しを出す。嘘のない言葉は、新鮮に胸に響いた。広告コピーのハウツー本だが、人に物事を伝える豊かな視野を得る本である。対象について深くどれだけ考えたか、アプローチの仕方が読みやすく書いてある。 もし文章力を心配して書けなくなっている人がいたら、お薦めしたい。勝負は文章力より中身です。読むと文章を書くのが楽になりますよ。</p>

レクイエム	<p>レクイエム・ハンドブック / 高橋正平著 東京音楽社, 1991 765.3-Ta33</p> <p>選者 参考係 (レファレンス担当) 高島豊</p> <p>モーツァルト、ヴェルディ、フォーレ・・・ テレビのCMで流れる曲も多く、「レクイエム」を愛聴している方は多いのではないのでしょうか。けれど、「レクイエム」が死者のためのミサということは知っていても、実際にどんな内容が歌われているかを知っている人は少ないのでは？ CDのブックレットにある歌詞を眺めても、「怒りの日」「不思議なラッパ」「御稜威の大王」などが何を意味するか、わかりますか？ モーツァルトのレクイエムの演奏に合唱で参加することになった私は、それらの疑問を解決すべくこの本と出会い、多くを学びました。歌は、音楽と歌詞が一体となって訴えてくるものです。これを読めば、レクイエムの各楽曲にどんな意味が込められているかがわかり、クリスチャンでなくても共感でき、曲を聴く楽しみがグンと増えること間違いなし！</p>
トレーニング	<p>やっではいけない筋トレ：いくら腹筋を頑張ってもお腹は割れません / 坂詰真二著 青春出版社, 2012.2 (青春新書intelligence) 780.7-Sa39y</p> <p>選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) DEN</p> <p>教養本は基本読まない(読めない)私ですが、昨今さぼり気味の筋トレに関する本だったため、手に取りました(週5→週1~2に減った)。内容は意外と堅実です。ぶるぶる震えて腹筋がつくというEMSの話もありますが、甘い話はないよなーと効果の有無に納得させられます。腹筋だけ鍛えても、体脂肪減らさないと腹筋が割れない話もあります(体験しているので事実です)。後半に簡単にできるエクササイズが載っています。椅子を使うエクササイズが多いんですが、我が家に椅子がないのですよね。勉強の合間に、筋トレなどいかがでしょうか？ 勉強に即戻りたくなるかもしれませんが、それも気分転換になるのでは。</p>
国語辞典	<p>広辞苑をつくるひと / 三浦しをん著 東京：岩波書店, 2018.1 (広辞苑 第7版 [付録2]) 参813.1-Ko39.a7-b2</p> <p>選者 図書館職員</p> <p>2018年1月12日に刊行された『広辞苑』第7版の付録で、『舟を編む』の著者、三浦しをんの取材記です。見出し語の意味を検討した国立国語研究所、活字、本文中のイラスト、図書館で配架するときには使われない外函製作、製本に携わる人々を取材しています。</p> <p>第7版は10年ぶりの改訂で1万項目が新たに加わり、類義語、特に動詞6000語以上の意味の書き分けを見直したとのこと。たとえば、「焼く」と「炒める」の書き分けでは実際に調理しながら推敲を重ねたそうです。電子辞書では味わえない物体としての「本」づくりの話も興味深いです。『広辞苑』第6版との比較も面白いでしょう。参考図書の本棚にあります。</p>
日本の小説	<p>屍者の帝国 / 伊藤計劃, 円城塔著 河出書房新社, 2012.8 913.6-I896s</p> <p>選者 図書館職員</p> <p>執筆途中、34歳でこの世を去った伊藤氏。その未発表作品を親交の深かった円城氏が引き継ぎ、壮大なSF冒険小説が誕生しました。この物語の世界では、死んだ人間は蘇生技術によって屍者となり、軍事力、労働力として利用されています。ふと「死人に口なし」ということわざが思い浮かびましたが、屍者もまた何の証言も証明もできない動く人形でしかありません。しかし、とある出来事がきっかけで医学生である主人公ジョン・H・ワトソンは、“意思を持ち言葉を話す屍者”の謎を追うこととなります。読み進めていくうちに、屍者をめぐる未知なる謎がすこしずつ解明されていき、最後は衝撃の結末が待っています。難解ではありましたが、鳥肌が立つほど心が震えた一冊です。</p>
	<p>最愛の子ども / 松浦理英子著 文藝春秋, 2017.4 913.6-Ma89s</p> <p>選者 カウンタースタッフ 図書館職員</p> <p>女子高生たちの家族ごっこの話なのですが、それを演じている当事者たちが実際の家族から傷つけられている矛盾。「女子高生だからって周囲が妙な期待を込めて色メガネをかけている」と作文に書いて呼び出されるシーンから始まるので、心してかからねばならないと居ずまいを正す読書でした。</p>

羊と鋼の森 / 宮下奈都著 文藝春秋, 2015.9	913.6-Mi83h
選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) DEN	
ジャンルは問わず小説を読む雑食のタイプですが、この小説を読んで一番に思い浮かぶのは、「澄み切った綺麗なイメージ」でした。私にとってほとんど知らない職業である調律師の話ですが、丁寧に書かれているため、とにかく文章が読みやすい。すっくと頭の中に溶けこんでいくように読んでいける小説でした。通勤の合間に読む予定が、帰って家で一気に読破したくらい内容も素晴らしい。勉強に疲れた時など、個人的にはおすすめです。難しい学術的な本をお読みになる際の、箸休めにいかがでしょうか？	
神様のカルテ / 夏川草介著 小学館, 2009.9	913.6-N583k
選者 N.O	
作家である夏川草介は、主人公と同じく若い医師である。地方病院の日常を描いた作品で、淡々としているのは作家にとって何処よりもそこが生活の場だからだろう。登場する病が身近なものばかりなのも日常感に拍車をかけている。対して人物は、気を抜くと実在する病院の話なのかと思うほどリアルだ。作家の、今の彼にしか書けないものを詰め込んだ一冊なのだろう。タイトルも意味深だ。某有名医が「人格者だと評される患者には、まるで神様からのギフトのような時間をもらえる人がいる。自分の死期を悟り、周囲に最後の想いを伝える機会を得るのだ」と講演で語っていた。オカルトめいたものだが、物語のキーマンの一人である安曇氏は正しくそういう人物だ。神様とは感謝や崇拜する対象か、あるいは人の身ではどうすることもできない無力さの象徴か。苦しい職場だ、だがそれでも働き続ける理由がある。若い医師の志や覚悟の想いの籠った作品を、ぜひ読んでほしい。	
献灯使 / 多和田葉子著 講談社, 2014.10	913.6-Ta97kc
選者 閲覧係 篠原 貴士	
読み始めは、鎖国だとか、インターネットがないとか、外来語はすべて日本語に置き換えたり、登場人物の特異な名前などに強烈な違和感をおぼえながら読み進めるうちに、「あれ？この世界はどこかで経験したか？」という、いわばデジャビューのような感覚におちいっていることに気付く。しかし登場人物たちは、将来に対して希望が見いだせない(ように見受けられる)ながら、なぜか霽雨気的に暗くはない。そう、将来に対して悲観的になったり、絶望していないことに、軽い驚きをおぼえる。そして読み終えたとき「ああ、これが現実でなくて、よかった！」と胸をなで下ろし、こんな世界はごめんだ、と決意を新たに、そのためにどうしたらよいかを考えるきっかけになる、そんな一冊です。	
愚者の毒 / 宇佐美まこと著 祥伝社, 2016.11	913.6-U92g
選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) DEN	
よくよく考えてみるとタイトルにひかれて借りることが多い気がします。こちら『愚者の毒』という何とも内容が想像できないため、そこに惹かれて手に取りました。読んでみて思ったのは、「結末は予想がつくのに、読むのを止められない」。電車で読むつもりが帰宅しても読んでいました。内容が内容だけに一気に読みまではいきませんでした(理由は読んでもらえればわかると思います)。読んだ後、知り合いの方に進めてみたら、その方もはまり、同著者の別の本も読んでしまったそうです。個人的な感想をあげるなら「何とも妙な魅力のある作品」でした。	
日本の美德 / 瀬戸内寂聴, ドナルド・キーン著 中央公論新社, 2018.7 (中公新書ラクレ624)	914.6-Se93nb
選者 閲覧係 篠原 貴士	
「美德」…というタイトルをただで、きっと道徳的な本だろうと思った、アナタ。その時点ですでに間違っています。軽やかなテンポで進む二人の楽しい遣り取りは、まさに“法話”を聞いているかのように読み進むことができます。そのうちの1つで興味深かったものを。「人間は82歳までボケなければ、その後もボケることはない！」そう。それならば“82歳までボケずにがんばろう！”という気持ちにさせてくれますね。お二人ともご高齢とは知っていましたが、96歳同士の同級とは、この本を読むまで気付きませんでした。この二人の若さの秘訣は何なのでしょう？おそらく、“何にでも興味を持ち続けること”“自分の意見をきちんと言うこと”“年をとっても若い人との接点を持ち続けること”ではないかと感じました。キーンさんが最後に未来を担う子どもたちへ、を書いています、学生のみなさんにも通じる内容だと思います。ぜひ一読を。	



英米文学	<p>ダーク・マター / ブレイク・クラウチ著 ; 東野さやか訳 早川書房, 2017.10 933-C935d</p> <p>選者 カウンタースタッフ (利用者サービス担当) DEN</p> <p>SFは昔よく読んでいましたが、最初のくんだり長いものも多く、この頃飽きる恐れもあり読んでいませんでした。こちらの本は特集コーナーにあり、タイトルが面白そうなので借りてみたのがきっかけです。個人的にSF小説で浮かぶのはH・G・ウェルズの『タイムマシン』です。ジュール・ヴェルヌは『80日間世界一周』『15少年漂流記』などで有名ですが、SFとして『月世界へ行く』『地軸変更計画(原題は「上もなく下もなく」)』など変わり種もあるのでお勧めです(タイトル面白そうに見えませんか?)さておき、こちらの本分厚いですが、最初のくんだりSFにしては短いので、読みやすい。どうなっていくのか、どういう結末になるのか、個人的には斬新でした(落ちは予想できてしまいましたけれども)。『2001年宇宙の旅』などよりは読みやすく、今風SFとして面白い作品だと思います。</p>
	<p>ママは何でも知っている / ジェイムズ・ヤッフエ著 ; 小尾芙佐訳 早川書房, 2015.6 933-Y14m</p> <p>選者 匿名希望</p> <p>推理小説っておどろおどろしくて長篇ばかりだし・・・と手を出しかねている人にこそおすすめしたい、会話中心でテンポのいいミステリ短編集です。アガサ・クリスティの「火曜クラブ」を彷彿させる「ママ」の安楽椅子探偵スタイルは玄人でも満足できるはず。</p>
フランス文学	<p>ポール・クローデルの日本: 「詩人大使」が見た大正 / 中條忍著 法政大学出版局, 2018.1. 950.28-C76c</p> <p>選者 図書館員 M.K</p> <p>ポール・クローデル(1868-1955)は、女性彫刻家カミーユ・クローデルを姉に持ち、自身も劇作家、詩人として多数の作品を残した人物です。また、外交官として1921年に駐日大使に任命され、実業家の渋沢栄一とともに東京の日仏会館を立ち上げるなど、日仏文化交流に貢献しました。</p> <p>日本滞在中は能、歌舞伎、文楽や日本画に親しみ、詩集『聖女ジュヌヴィエーヴ』や『四風帖』などの作品を発表しました。この本では、大正期に日本の文化がどのように評価され、受容されたかを垣間見ることができます。</p> <p>2018年はクローデルの生誕150年にあたり、それにちなんで本学図書館の貴重書のなかからクローデルの作品などを展示する企画を担当しました。今回に限らず、企画の際には多数の資料に向かって「産みの苦しみ」を味わうのですが、ふと、時間を超えてその人物の人生に触れられたような気がする瞬間があります。そういった意味でこの本は、私にとって忘れられない1冊になりました。</p>
スラブ文学	<p>12人の蒐集家 / ティーショップ / プラン・ジヴコヴィッチ著 ; 山田順子訳 東京創元社, 2015.11 989.23-Z4j</p> <p>選者 匿名希望</p> <p>有形無形のものを集めるコレクターと、それに翻弄される者とお短編集。日常と乖離具合がちょうどいい、『奇妙な味』を味わわせてくれる幻想小説です。</p>

獨協大学図書館 2019.2.5